



モスクワ ★ クラウン 騒動記

イラスト
高野呂音+橋本千鶴子

91年10月10日から10日間に渡って開催された「第一回モスクワ・クラウン・インターナショナル・フェスティバル」に、初めての日本人クラウンとして参加した高野さんと橋本さんが、その報告を寄せてくれた。彼女たちは、クラウン養成学校「クラウン・カレッジ・ジャパン」の第一期卒業生。現在はオープン・セサミという事務所を設立し、クラウンとしての活躍の幅を拡げている。

今回のフェスティバルは、ソ連で民間団体が主催する初めてのコンクールだそう。運営委員長がソ連の有名な道化師ドゥーロフの孫娘のチレーザ・ドゥーロバ(Tereza DUROVA)、審査委員長にこれも有名な大御所ニクーリン(NIKURIN)を迎

え、総合司会はクラウン・スターのアントーシカ(ANTOSHKA)といった具合でモスクウイッチには遜の出そうな豪華な顔ぶれて開催されました。最終的には通路は立ち見で2階席は手摺にまたがって座っている人で溢れ、それでもまだ見たいという人の混雑がロビーや楽屋口から外の寒い路上にまでこぼれたがえしてしまいました。聞くところによると、ダフ屋の値段が定価の百倍くらいまで吊り上がったそうです。フェスティバルでは、3百人のクラウン・パフォーマンスを見ることのできました。日本では、サーカスも含めて、私たちはそれほど多くのクラウンを見たことがありませんでしたし、情報量も少なかったのて、

本当に勉強になりました。いままでソ連のクラウンはすべて凄くて面白んだと思いついていた私たちは、実際にはピンからキリまであって、つまらない人もいるんだと知ったとき、あまりびびりすぎたので、しばらくボカんとしたままでした。でも全体的なレベルは、やっぱり凄いな。パフォーマンスとしての肉体的な完成度も高く、ユーモアのセンスも豊かです。そして自分たちを見せる表現力もパワフルです。舞台上に登場して黙って立っているだけでも、もう存在感の強さが断然違います。その存在感のパワフルさについて強く感じたのは、日常的な国民性の違いです。個々人が強く自信を持っているというのてしょうか。他人がどう思おうと、口論になつたとしても、自分の気分や気持ち考えを、大声ではっきり主張します。日本でのように、うまく丸くおさめるということをしたら、彼らは生き残れないのだと思います。そういう人生の姿勢がパフォーマンスにも反映していると感じました。そうしたパフォーマンス・エナジーの高さを、この日本で生活している私たちが、どのようにな自分たちのなかに生かしていくか、今後の課題です。

★ そんななかで、3百人いたクラウンのなかから予選を通過し、第1戦から第3戦を経て決勝まで残れたことは(理由はどうあれ、奇跡に近い)と感じています。また、前半トラブル続きだった私たちを、身振り手振りや言葉の勢を乗り越えて、いつも暖かく励ましてくれたウクライナやウズベク、そしてコーカサスのクラウンたちが、ある日突然私たちのシヨリのときに、花束と風船を持って舞台上上がって来てくれたことは涙が出るほど嬉しかったです。また上位3賞以外に、ほとんどお祭り気分のノリでたくさんのお小な賞がありました。そのなかの「特別賞」をいただけたことは、なにか頑張ったご褒美のようでも嬉しく思いました。とはいっても私たちには何だかよくわからない賞なんてすけどね。でも、私たちにとってはささやかですが精一杯のお土産です。さらにソビエト映画「道化師の世界」にも出演し、これは92年3月頃クラウン・アップの予定で、完成後にビデオ・コピーを送ってくれることになっていきます。このほかにもテレビ・ラジオ・新聞にひっぱりだこで、帰りの空港で、あのKGBまでが私たちを知っていたのは驚きでした。そのうえ、今回大きく広がった友達の輪のおかげで、92年は約3ヶ月、キエフ、モスクワ、ブルガリア行きが決まりました。

いろいろ大変でしたが、このような好結果に終わったことを、応援してくださった皆様に感謝しています。 さて、私たちはクラウンです。クラウンというのは英語などで道化師のことです。よく日本ではピエロと言われますが、ピエロではありません。ピエロというのは、クラウンからコメディアン・デ・ラルテの役のひとへ発展したもので、日本では哀愁を帯びたイメージをもたれているようです。道化師のことをピエロと呼ぶのは日本だけです。クラウンの説明が長くなりましたが、いつも「クラウンで何ですか」という質問を受けるところから私たちの仕事が始まるわけです。世相を反映して、海外では数多くのクラウンが活躍している昨今、日本でもようやくクラウンが知られるようになってきました。それでも使う側がクラウンがどういうものかを知らないために、結果的にチンドン屋さんの感覚であつたりすることがあるわけです。私たちはそんななかで、一つひとつ説明し、クラウンを好きになつてもらふことで需要を拡げました。モスクワでは、たくさんのお体験がありました。一番の驚きはクラウンの社会的地位の高さでした。ま

ず人々に「クラウンはインテリの仕事で、自分たちにとって必要な芸術だ」という思いが浸透しているためとても大切にされています。日本では小学生にまで「おまえ、どこの大

学出てんだよ」「給料いくら？」など

といわれることが日常茶飯事だったので、これは大きな驚きでした。クラウンをやっていると、大人までが「そんなことをして恥ずかしくないですか」と真面目な顔で聞いてくる人の多い日本と、なんと違うんでしょう！

多くの人を笑わせ、日常の不愉快や辛さなどを忘れさせてくれるクラウンは、国家的英雄でもあるわけです。小さな子供たちが一番最初に憧れる職業がクラウンだということもとても嬉しい驚きでした。少なくとも、だれもがクラウンを知っていません。「クラウンとは何か」という言葉の概念ではなく、楽しい体験として、クラウンがどういうものかをわかっていきます。

私たちにとってはとても不思議なことですが、旅の途中で困ったことが起こったとき、「私たちはクラウンです」という一言で、どれだけたくさんさんの見ず知らずの人がにこやかに

助けくれたでしょう！（モスクワでは、人がにこやかしていることなんて珍しいんですから）

また、モスクワのサーカス学校の先生がこんなことを言っていました。「日本はオリンピックでも体操競技がとても強いのに、なぜアクロバットのクラウンがないのか？」と。なんと答えていいのか困りましたが、こんなふうなところにも発想の違いが出てくるのかと、なぜか妙に感心したことでした。

★

多くの方はテレビや新聞でご存じかと思いますが、日常のモスクワはものすごいところです。衛生状態の悪さ、医療レベルの低さ、物資の手に入りにくさなど、毎日の不愉快な出来事は枚挙にいとまがありません。そうした生活のなかで一番感じたことは「人間の豊かさっていったい何だろう？」という疑問でした。たいへんな生活を抱えながらも、彼ら

は劇場やサーカスに足を運びます。クオリティの高いそれらの芸術が、平均月収の百一五十分の一の値段で見られるということもありますが、食べ物すら自由に手に入らない状況のなかでも、芸術をささえる底力を持っている、自分の人生を笑って楽しむ心のゆとり、大きさを感じました。こうした観客の存在が、クラウンはいうまでもなく、サーカスやオペラ、バレエを世界的なレベルにまで育てあげてきたといっても過言ではありません。

私たちは「豊かさとは夢見ることのできる力だ」と思っています。たしかに日本は何でもあって便利だし豊かだといわれていますが、本当にそうでしょうか？ 海外からすでに完成度の高いパフォーマンスを買う経済力があるのに、国内でそのレベルまでの芸術を育てられないのはなぜでしょうか？ 素朴な疑問です。たとえば私たちのレパトリーに

細長い風船を使ったものがあります。風船でいろいろな動物や花を作ったりマジックをするものです。モスクワでも日本でも皆それを欲しがりますが、その欲しがり方に違いがあります。日本の子供たちの多くは、てきあがった状態のものをいくつも欲しがります。原型のまま渡して、ふくらますところから一緒に作ろうと誘っても、どうせできっこないからと、はじめから諦めて手を出しません。

モスクワでは、逆に作ったものをあげようとしても、自分で作りたいと言って一日中それに挑戦して遊んでいます。それこそ一本の風船がシワシワになるまでそれで遊んでいて、自分の力でやるとそれがふくらむと得意気に見せに来たりします。大人の人もとてもお茶目で、ちよっとテレクさそうな顔をして、「子供に作ってあげたいから」なんて言って、風船をあげると、周りの子供たちと一緒に張り合っふくらまそうと奮闘している姿もありました。また、数に限りのあるものですから、なくなってしまうときの対応が日ソでは

ずいぶん違います。物不足に慣れて
いるせいか、すぐ納得してくれるモ
スクワの子にはホッとしました。

……たつたそれだけの違いだったの
ですが、子供に接する機会が多いせ
いか、考えさせられました。

★

最後に、日本人のパフォーマーと
して危機感を持っていることがあり
ます。パブルが崩壊したとはいえ、
相変わらず「円」は強く、海外から
クオリティの高い芸術を招聘する力
を日本は持っています。モスクワの
フェスティバルで出会ったたくさん
のクラウンたちも、外貨を得るため

に日本に來たがっていました。彼ら
にとって、日本の初心者マークのパ
フォーマーのわずか1日分のギャラ
だけでも、実に3年は遊んで暮らせ
るのですから、彼らほどの技術や芸
術性をもっていればなおさらです。
長い時間をかけて、国家をバックに、
良い先生、良い観客に育て上げられ
た一流の芸術家たちが、安いコスト
でどんどん日本に入ってくれば、日
本人のパフォーマーはたいへんです。
どう頑張っても、日本で同じ生活を

している以上、彼らと同じペイでは
生活できないからです。その環境は
（施設といい、先生の不在といい）
彼らのそれとは比較にならないほど
お粗末なのですから。

「危機感」などと大袈裟に書きまし
たが、でも私たちはあまり悲観して
いません。設備が必要ならば作れば
いいし、それがだめなら、あるところ
に行けばいい。クラウンのギャグは
アイデアですから、それと同じこと
で、現状を嘆いてなにもしないとい

るよりも、良いもの、おもしろいも
のを創ろうとしていく姿勢が道を開
いてくれると思います。私たちは、
いまは多くを持っていませんが、可
能性を信じています。

笑うことは、自分を救う薬です。
豊かさは、夢を見る力のことです。
モスクワで得てきた経験の一つひ
とつを生かして、たくさんの人にク
ラウンの楽しみを広げられればと思
っています。
今後に期待してください！